

東方教会と西方教会の三位一体論

V. ロースキーとK. バルトの比較

関口 康

ファン・ルーラー研究会の皆さま、こんにちは。

じつは椎間板ヘルニア再発のため、思うように歩けず、本日は行なわれているせっかくの東部中会宣教研究所主催の一泊研修会に参加できなかったことを、たいへん悔しく思っています。講師の稲垣久和先生（東京基督教大学教授、東京恩寵教会長老）のお話を聴きなかったのに、残念です。

あまりに悔しいので、「くそー」と思いながら一生懸命勉強することにしました。もうご存じの方もおられるとは思いますが、ぜひご一読いただきたい本の書評を書きました。雑文ですが、ご一読いただけますなら、心の痛みも癒えるものがあります。

ご紹介したいのは、以下の本です。

アラール・ラーツ著『東方神学と西方神学における三位一体論 K. バルトとV. ロースキーの比較研究 』

Alar Laats, *Doctrines of the Trinity in Eastern and Western Theologies*, Peter Lang, 1999.

アマゾンコムで買えます。

http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/3631342780/ref=sr_aps_eb_2/249-1635500-8833945

本書は、1996年に著者がケンブリッジ大学に提出した学位論文です。著者アラール・ラーツ氏は、ロシアの西隣にあるエストニア共和国の首都タリンで1954年に生まれ、タルトゥ大学で物理学、またタリンルーテル神学校とロシアのサンクトペテルブルク正教神学院で神学を学んだ後、英国のバーミンガム大学(M. A.)とケンブリッジ大学(Ph. D.)に留学。現

在はタルトゥ大学神学部で教鞭をとっておられます。

本書の内容は、表題が示す通り、かたや20世紀のプロテスタントの立場を代表する神学者カール・バルト[1886-1968]と、かたや20世紀のロシア正教会(オーソドックス)を代表する神学者ウラジミール・ロースキー[1903-1958]の、三位一体論についての比較研究です。

ロースキーは、1903年、サンクトペテルブルク生まれのポーランド人。1923年フランスに移住し、ソルボンヌ大学で学び、主にフランス語で著作を発表。1958年死去。日本においてはすでに、東京大学の宮本久雄教授の名訳による『キリスト教東方の神秘思想』(劉草書房、1986年)を通して広くその名を知られています。この『キリスト教東方の...』は、我が恩師大木英夫先生のお言葉をお借りするなら、「東方神学を自家薬籠中とする名著」であり、「質的にバルトの九千頁(教会教義学)に匹敵するもの」です。

カール・バルトの紹介は、皆さんのほうがよくご存じだと思いますので、省略します。詳しくは、E. ブッシュ著『カール・バルトの生涯』(新教出版社)などをご参照ください。

本書『東方神学と西方神学における三位一体論』の全体は三部に分かれ、

第一部は「カール・バルトの神学における三位一体論」

第二部は「ウラジミール・ロースキーの神学における三位一体論」

第三部は「各帰結の比較」

というタイトルが付けられています。

著者ラーツ氏自身が明らかにしている本書執筆の目的は、従来語られてきた東方教会と西方教会の神学的立場の「違い」についての「ステレオタイプ的見解」(stereotypical opinion)に修正を迫り、東西両教会の対話に新たな材料を提供することです。

問題の「ステレオタイプ的見解」とは「アウグスティヌス的なイントラ・パーソナル(intrapersonal)な三位一体論が西方教会の教義であり、フォーティオス的なインター・パーソナル(interpersonal)な三位一体論が東方教会の教義である」(p.11)という見方である、とラーツ氏は述べています。

この見方の修正を迫るために、ラーツ氏の選んだ道は、バルトを代表とする「西方教会の神学」と、ロースキーを代表とする「東方教会の神学」を比較することでした。ラーツ

氏によると、「バルトもロースキーも、現代の神学者たちの中で影響力を持っているが、同時に、彼らは、現代神学者たちとは違い、彼ら自身が負っている神学的諸伝統に深い根を持っている」(p.12)とのこと。

わたし自身は、バルトをして西方神学の代表者とみなすことには、問題を感じます。しかしバルトが、そしてロースキーが「伝統」を重んじる(少なくとも、「伝統」から真剣に学ぼうとする)神学者であった、というこの点は、誰も否定できない紛れもない事実でしょう。「それゆえ、われわれにとって、彼らを理解することこそ、彼らの負っている諸伝統を理解することの助けになるのである」(ibid.)。

本書を読んでいて特に興味を引かれた点は、両者の比較を通して(これまでいろいろ聞かされてきた)相違点だけではなく、むしろ(予想や憶測を越えた)多くの共通点が明らかにされている、ということです。「へえ」と驚き、「う~む」と考えさせられる内容がある、なかなか読み応えを感じる一書です。

比較の対象となっている諸点は、主に以下の五点です(以下は、わたしなりの要約です)。

1、啓示の概念について

バルトもロースキーも「啓示」についてしばしば語り、人は啓示を通してのみ神を知りうるという理解において共通している。しかしロースキーにおいては、神の超越的側面が神の本質であり、顕在化するの神のエネルギー(力)の側面である。バルトにおいて、三位一体の第一位格としての御父は、お隠れになっている。神は幕屋の中におられる。そして神の顕現的側面、すなわち啓示における除幕の側面こそが御子である。バルトにとっては超越と顕現の両原則が三位一体の中にあるが、ロースキーにとって超越と顕現は神の三位一体的構造へと直接結びつけられるものではない、など。

2、信仰と知解の関係について

バルトもロースキーも、被造物は神のみわざの痕跡(trace/ vestigia)があると語る。神的でないものの中に、神的なものの類比(アナロギア)がある。しかし、二人とも、被造物における痕跡に基づいて神的なものを理解するという可能性を否定し、事実上、二人ともローマ・カトリック的「存在の類比」(アナロギア・エンティス)の道を否定する。彼

らにとって、神認識の出発点は、啓示である。ところが、この出発点からさらに進んで、人間の心がどのように動くかという点で両者は非常に異なる。「信仰は知解を探求する」(the faith seeks understanding)という命題が、バルトの特徴である。これに対し、「知解は信仰の諸現実を探求する」(the understanding seeks the realities of faith)という命題がロースキーの特徴である、など。

3、人間の人格性(personhood)について

バルトもロースキーも、personhoodについて多く語る。この二人によると、人間存在の内なる「神の像」(imago Dei)が人間の人格性(personhood)である。人格の存在と神的位格の存在とは、類比的な関係にある。ただし、人格と神格は一致するものではなく、オリジナルとコピーの間には根本的な差異がある。ロースキーの神学において根本的に重要なことは、三位一体の神、ならびに人間存在における「格」(person)と「性」(nature)の区別である。「格」は「性」の一部ではなく、「性」によって制御されるものでもない、など。ところが、バルトの神学においては、ロースキーが苦心して論じているほどに緻密な「性」(nature)の概念は展開されていない。バルトはむしろ、人間の「性」は二重的であると語る。「我」は「汝」との出会いと協力関係、あるいは対立関係の中でのみ存在する。人間の性的関係が語られ、また、三位一体の神の内なる御父と御子との交わりが語られる。バルトにおいては、「我」と「汝」の関係こそが人間の人格性(personhood)にとって本質的な構成要素である、など。

4、三位一体の統一性について

バルトもロースキーも、三位一体の統一性を強調する。この二人はこの統一性を表現するための独自の定式を持っている。ロースキーによると、三位一体の統一性の保証は、「御父のモナルキア(独占的支配力)」である。この場合の「モナルキア」の意味は、「三位一体の第一位格こそが他の二者なる神的位格の源泉である」(御父が御子を産み、御霊を発出する)ということである。他方、バルトによると、三位一体の統一性の保証は、御父と御子からの「御霊の発出」である。換言すれば、「フィリオクエ(御子からも)こそが統一性の担保である。バルトの神学における「フィリオクエ」概念は、ロースキーの神学における「モナルキア」概念と同等の機能を持っている。どちらも「三位一体の統一性の保証」である。しかし、この二人の「統一性」の理解が異なっている、など。

5、三位一体の「外なる」(ad extra)みわざについて

バルトとロースキーの経綸的三位一体論のモデルの比較。この二人の神学者の「経綸」(economy)の概念を厳密に扱おうとするならば、いずれも、時代や論点によって異なる意味で用いている。少なくとも、バルトに二種類、ロースキーにも二種類、合計四種類の意味がある。ここでは、後期バルトにおける「和解(reconciliation)と贖い(redemption)」としての「経綸」、またロースキーについては「贖い(redemption)と神化(deification)」としての「経綸」を取り上げる、など。

たとえば、こんなふうに、非常に興味深い分析がなされています。

本書を読みながらわたしが感じたもう一つ重要な点は、我々の研究会の眼目であるファン・ルーラーとの比較という点です。

わたしはまだ、ファン・ルーラーの三位一体論について多くを語る程の材料を持ち合わせていませんが、ラーツ氏が描き出しているバルトとロースキーの比較を読むかぎりにおいて言えば、ごく素朴な印象として、ファン・ルーラーの三位一体論は、バルトのそれよりも、ロースキーのそのほかに、より多くの親和性(アフィニティ)があるのではないかと感ぜざるをえません。「格」と「性」の区別、また「フィリオクエ」や「神化」概念の扱い方などを見ながら、そう感じます。言うまでもなく、バルトもファン・ルーラーも「西方神学の伝統」、そして「改革派神学の伝統」を自覚的に受け継いでいるにもかかわらず、です！

そう考えると、「バルトとロースキー」の次なるは、「バルトとファン・ルーラー」、あるいは「ロースキーとファン・ルーラー」というテーマで研究がなされていくと、さらに面白いものが見えてくるのではないだろうかと思いました。

じつを言いますと、これまで世界中で書かれたファン・ルーラーを主題に取り上げた学位論文の中には、「ファン・ルーラーとバルトの比較」というテーマで書かれたものが、なぜか未だに存在しないのです。「ファン・ルーラーとカイパー」、「ファン・ルーラーとシュライエルマッハー」、「ファン・ルーラーとティリッヒ」、「ファン・ルーラーとモルトマン」などはあるのに、です。なぜ誰も(ファン・ルーラー研究において最も肝心と思われる)バルトとの比較をしないのでしょうか？

とか書いていると、「あんたがやれ！」と言われてしまうかもしれませんね。わたしに書けるとは思いませんが、不遜なわたしが書くと非常にデンジャラスな争論の元になりかねません。愛する妻子の生活を守りたいので、やめときます。

ただ、そういうテーマの研究書が、今のところ世界に一つも存在しないことだけは事実です。そのテーマならば、ぜひ読ませていただきたいと願っておりますので、果敢にチャレンジしてくださる方がおられるようでしたら、資料提供くらいなら応援できると思いますので、ぜひご連絡くださいませ。とくに、30才に達していない若い頭脳を持っておられる皆様(Who?)にはがんばっていただきたく、心から願っております。腰痛持ちのおじさんは、そろそろ引退を考えなければなりません。

だんだん下らない話になってきましたので、この辺で失礼いたします。それではまた。

(2003年2月17日)